

第7回

シリーズ「霊的集団の誤りを正す」第3弾

ともひさ
太田朝久

駒場集団の言説の誤り

本講座では、霊的集団「李勝哲・駒場久美子集団」の言説の誤りを取り上げます。彼らは、16万訪韓セミナーのみ言などを自分か^{自分か}つてに解釈し、自分たちの活動を正当化しようとしています。彼らの「誤った言説」を文鮮明先生のみ言を中心に正しながら、私たちが持つべき正統的な信仰とは何かについて説明します。KMS会員とAPT F会員は動画版シリーズ「霊的集団の誤りを正す」第3弾を、KMSウェブサイト^{ウェブサイト}で視聴できます。第1弾、第2弾も併せてごらんください。また、本講座の第6回は2014年12月10日号に掲載されています。なお、本文中、駒場資料からの引用は茶色で色分けしています。(編集部)

十三、み言は二性性相ゆえに「聖霊のみ言」が必要と主張する誤り

駒場集団は、「原理」のみ言以外に「聖霊のみ言」が必要であると主張するその根拠として、『原理講論』四九ページから次の一節を引用します。

「創造原理を見ても、み言が二性性相から成り立っているがゆえに、そのみ言から創造された被造物も二性性相からなるものでなければならぬ。原理49」(駒場資料、六〇ページ)

駒場集団が引用する『原理講論』のこの部分の「そのみ言」の意味を、さらに考察しておかなければなりません。なぜなら、み言が二性性相であるという点のみを強調するならば、それは「二元論ではないか」という疑念が生じるためです。

『原理講論』は、確かに「み言が二性性相から成り立っている」と述べていますが、その前の四六ページで、「神は陽性と陰性の二性性相の中和的主体としてもいまし給

う」と述べている点を踏まえておかなければなりません。

神様の本質は「二性性相の中和的主体」と定義されているように、あくまでも一元論であって、二元論ではないのです。神様は中和的主体であり、唯一絶対であることを明確にしておかなければなりません。こう考えると、み言は唯一であり、異質な二つのみ言があるのではないのです。

したがって、「原理」のみ言以外に「聖霊のみ言」が必要であると主張する駒場集団の言説は誤りであり、詭弁にすぎません。真のお父様が語られたみ言から離れ、「原理」にない言葉を「聖霊のみ言」と主張し、かつてに語ることに対し、お父様は次のように戒めておられます。

「伝統はただ一つ！ 真のお父様を中心として！ 他の誰かの、どんな話にも影響されてはいけません。先生が教えた御言と先生の原理の御言以外には、どんな話にも従ってはならないのです。……他の言葉を述べるのを許しません。……どのような御言も、第二の御言を許しません！」(『祝福』

一九九五年夏季号、六八ページ)

「聖霊のみ言」とは、「第二の御言」に相当するものであり、それを主張すること自体がこの警告のみ言に背くことです。

十四、モーセ路程で「幕屋の摂理」が必要になったように、現代でも「聖霊のみ言」の摂理が必要であると主張する誤り

駒場集団は、モーセ路程において、イスラエル民族がモーセと一つになれなかったために幕屋の摂理が必要となったように、現代でも統一食口^{シツク}たちが真のお父様と一つになれなかったため、「聖霊のみ言」の摂理が必要になったと主張します。駒場集団の資料には次のように記されています。

「メシヤと一つになることができなければ、メシヤの心の秘密、すなわち性的的愛を明らかにし、教えてくれる新しいみ言が現われて、み言を絶対信仰し、順従しながら進むみ言の摂理が必要です。これはモー

セ路程によく現われています。ユダヤ民族がモーセを信じて一体になったら幕屋の摂理は必要なく、ただモーセの家庭と一つになって進めば、すぐカナン^{カナン}の地へ行くことができます。同じくメシヤと心情一体、すなわちメシヤの心の中^{ココロ}の愛を悟って行うことができなければ、人間の責任分担としてのみ言の摂理が必要になります。このみ言を「聖霊のみ言」と言います」(駒場資料、七四ページ)

駒場集団は、このように述べ、『原理講論』三七五ページから次の一節を引用します。

「第一次民族のカナン復帰路程において、もしイスラエル民族が不信に陥らなかつたならば、モーセの家庭は幕屋の代理であり、モーセは石板と契約の箱の代理であり、また、モーセの家法は、天法を代理するはずであつたから、彼らには、石板とか契約の箱とか幕屋とかが必要ではなく、そのままカナンに入つて、神殿を建てるはずであつたのである。原理375」(駒場資料、七五ページ)

こう主張することで、駒場集団は「聖霊のみ言」の必要性を意義づけしようとしています。しかし、これは誤りです。『原理講論』は、神様がモーセ路程で「幕屋の摂理」を立てられた理由を次のように論じています。

「もしイスラエルがみな不信に陥るとしても、モーセ一人だけでも残つてその幕屋を守るならば、その民族は再び蕩滅^{うちげん}条件を立てて、幕屋を信奉するモーセを中心として、その基台の上に復帰することができるとある。その上、もし更にモーセまでが不信に陥つたとしても、その民族の中の一人がモーセを代理して最後まで幕屋を守るならば、また、彼を中心として、不信に陥つた残りの全民族を復帰する摂理を、再びなせることができたのであつた」(三七五ページ)

幕屋の中心に収められた「二枚の石板」は、モーセがシナイ山で神様から授かった十戒が刻まれたものですが、それは、やがて来るべきメシヤである「真の父母」を象徴します。つまり個性完成したアダムと工

バを意味するものです。

「イスラエル民族が……滅亡するのを心配されて、神様がモーセをシナイ山に呼ばれ、四十日間モーセに断食をさせて二つの石板を与えられました。それが何であったのかといえば、アダムとエバ、『真の父母』を象徴していたということを知らなければなりません」(『ファミリー』一九九八年四月号、一七〇一八ページ)

ゆえに、『原理講論』で説明されているように、もしイスラエル民族が不信に陥り、さらにモーセまでが不信に陥ることがあ



図1

たとしても、誰か一人でも「二枚の石板」を中心に置く「幕屋」を信奉する者がいれば、神様は復帰摂理を再び立て直すことができるように配慮されたのが、幕屋の摂理であるということです。

現代の摂理は、「二枚の石板」の実体である真の父母様が顕現された時代です【図1】。したがって、いかなる状況に置かれても、誰か一人でも真の父母様を絶対的に信奉し続ける人がいるなら、神様は摂理を導くことができるといふことを教えてくださったのが、モーセ路程の「幕屋の摂理」です。

祝福家庭は、どこまでも真の父母様を信奉していかなければなりません。駒場集団のように、真のお父様が語ってもおられない「聖霊のみ言」を信奉させようとするのは、真の父母様から祝福家庭を引き離そうとするサタンの陰謀です。それは、「聖霊のみ言」を語る「別の人物」に服従させるサタンの策略と言わざるをえません。

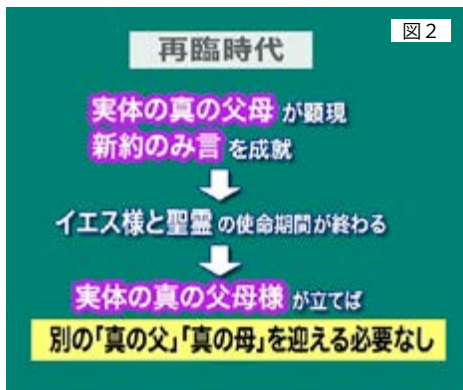
十五、実体の「真の母」が立って
おられるのに、いまだに「聖霊」
の必要性を説くことの誤り

鶴子夫人^{ハクチヤ}が顕現しておられるにもかかわらず、その後において、さらに「聖霊」が現れると説くのは誤りです。

この駒場集団の言説の誤りを理解するため、「聖霊」とはいかなる存在なのかについて明確にしておかなければなりません。真のお父様は次のように語っておられます。

「アダムとエバが、神様のみ旨のとおり個人完成、すなわち人格完成を成し、神様の祝福の中で夫婦関係を結び、神様と完全一体を成し遂げていたならば……(彼らは)人類の真の父母になつていたでしょう」(『平和神経』二〇三ページ)

本来ならばアダムとエバが真の父母となつていましたが、彼らは墮落することで真の父母になることができませんでした。その真の父母を取り戻すため、二千年前にイエス様が降臨されました。しかし、『原理講論』に「イエスと聖霊とは、神を中心とする霊的な三位一体をつくることによつて、霊的真的父母の使命を果たしただけで終わった」(二二八ページ)とあるように、



聖霊とは、霊的な真の父であるイエス様の相対に立っておられる霊的な真の母です。現代は、イエス様が成せなかった使命を果たすために、真のお父様が再臨主として実体の真の母を復帰した時代です。『原理講論』は、聖霊の使命が終わることを次のように論じています。

「日と月はイエスと聖霊を象徴している……日と月が光を失うというのは、イエスと聖霊による新約のみ言が、光を失うようになるということの意味するのである。……イエスが再臨されて、新約のみ言を成

駒場集団は、『原理講論』にない「聖霊を送るための基台」という言説を主張し(駒場資料、二二八ページ)、「1993年重生の役事^{やくじ}を始めるために、1992年女性連合を創設して、象徴的な世界的聖霊の使命を果たすことができるように基盤を造成した」(同、一三八〜一三九ページ)と述べて、聖霊のみ言の必要性を訴えます。実体の「真の母」が立たれた一九六〇年から、既に重生の役事である祝福結婚式が、三家庭から始まって三十三家庭、七十二家庭、百二十四家庭へと拡大しながら挙行されているにもかかわらず、一九九三年に重生の役事を始めると主張すること自体が、誤った摂理観です。

さらに、駒場集団では、「(真のお父様が)2008年へリ機事故の苦難路程を自ら歩んで行かれながら、7・8^{七(ヒト)}・8^{八(ヤ)}年の条件を通して2008年を摂理的に2007年と同じ立場を立てられました」(同、一三九ページ)とし、聖霊のみ言が現れると主張します。

実体の「真の母」として真のお母様(韓

就し……新しい時代がくることによって、そのみ言の使命期間が過ぎるといふことを意味する」(一五五〜一五六ページ)

このように再臨時代は、実体の真の父母が顕現され、新約のみ言を成就するときが来るため、現代まで霊的な真の父母として役事してこられたイエス様と聖霊の使命期間が過ぎ去り、終わるときが来るのです。実体の真の父母様が立たれたなら、それ以降、それに取って代わる別の「真の父」「真の母」を迎える必要はありません【図2】。実際、真のお母様が実体の真の母として立たれ、真のお父様と共に「重生」の役事である祝福結婚式を挙げてこられました。

それにもかかわらず、いまだに「聖霊」を迎える必要性を説く駒場集団は、神の復帰摂理がどのように展開するのかを全く理解していない霊的集団です。

彼らの背後には、実体の真の父母様が勝利されたにもかかわらず、それを認めたくない悪霊たちがうごめいていると言わざるをえません。